

図説 経済学体系 1

経 済 学



戸田武雄監修

佐藤武男 編集
小野俊夫

学文社刊

経済学体系 1

経 済 学

戸田武雄 監修
佐藤武男 編集
小野俊夫

学 文 社 刊

執筆者紹介 (執筆順)

戸田武雄 駒沢大学教授 (第1章)

松本正信 独協大学助教授 (第2章)

蔵下勝行 専修大学教授 (第3章)

小林好宏 北海道大学教授 (第4章)

石井 学 高崎経済大学教授 (第5章)

加藤義喜 日本大学教授 (第6章)

小野俊夫 早稲田大学教授 (第7章)

佐藤武男 東京学芸大学教授 (第8章)

図説 経済学体系1 経 済 学

昭和54年4月30日 第一版発行

昭和57年4月1日 第二版発行

検 印
省 略

監修者 戸 田 武 雄

編集者 佐 藤 武 男

小 野 俊 夫

印刷所 中越印刷製紙株式会社

東 洋 写 植

発行所 株式会社学文社

代表者 北 野 登

東京都目黒区中目黒1-2-6

電話 (715)1501㉞ 振替東京3-98842

(落丁・乱丁の場合は本社でお取替します。)

(定価はカバーに表示してあります。)

ISBN4-7620-0049-3

は し が き

昭和46年4月、新学期のはじまのころ、駒沢大学の研究室に、学文社の北野社長ほか、編集の方がお見えになり、同社の15周年記念の事業のひとつとして、「図説経済学体系」の刊行の計画のあることを話され、その第1巻の『経済学』の監修者として、わたくしにも参加せよということであった。そのとき、実際の編集は、佐藤武男教授と小野俊夫教授をわずらわし、わたくしもそのなかの一部の執筆を担当することとなった。人選その他構想はもっぱら両教授のものであり、その後わたくしも、数回の編集会議に参加し、全編にわたりできあがった原稿については目を通し、個人的な意見を申し述べる機会をもった。ただし数名の共同著作といっても、それぞれ執筆者の個性もあり、見解もちがうとおもわれるので、無理に統一しようとはせず、もっぱら編集の任にあたられた両教授に御苦勞をねがった次第である。

色刷りのグラフを挿入したことは、本書の特色であって、大方の御賛同のえられるところと期待するが、内容そのものは、今日のわが国の経済学界を反映して、かならずしも統一されているとはいえない。しかし平和共存はイデオロギーや理論の並存ではないだろうから、本書の内容そのものを、各章の終わりにつけた参考文献を参照されて、読書や対話を通して、より高い立場に高められることを期待したい。そうした材料として本書が活用されれば、幸甚である。

世界経済および日本経済が現在おかれている地位、それがどこから来て、どこへ行くか、その客観的な可能性の法則を探求することが、今日の経済学の課題であろうが、そのためにわれわれはまず謙虚に過去・現在の歴史の事実をよく知らねばならない。また日常、接触する新聞・雑誌・テレビ・ラジオなどのニュースからも、戦争や火災や交通事故、労働災害などで、毎日どれだけの人が死傷してゆくか、物価がどういうふうになっていくか、世界の人口がどのくらいで、そのうちどれだけが社会主義圏に住んでいるか、日本には資本家、労働者、農民がどのくらいいるのかなどの数字に通じなくてはならない。そういう意味で、経済学は歴史の科学であるとともに実証科学である。そして、そうした事実を通して法則を学びとらなければならない。古典や理論は現実のなかに生きてこそ、古典であり理論である。

そうした意味で、本書を読まれる読者は、第1章の経済体制と、第8章の経済学の発展をはじめに読まれることがわかりやすいのではないかとおもふ。本書が経済学の知識の普及と啓蒙に役立つことを、こいねがってやまない次第である。

なお、本書は昭和46年にB5判『図説経済学』として刊行されたものであるが、このたび読者諸君の勉学上の便宜を考慮して新たにA5判で刊行することとした。

昭和54年3月1日

戸 田 武 雄

目 次

第1章 経済体制

I 資本主義発達史	1
1. 経済学	1
2. 自然経済と商品経済	3
3. 資本主義の発生	6
4. イギリス資本主義の成立	7
5. 資本主義の発展	8
II 資本主義と社会主義	9
1. 資本主義の基本法則	9
2. 資本の蓄積	10
3. 矛盾の発生	12
4. 資本の流通過程	13
5. 社会主義の基礎	14
III 市場経済と計画経済, 混合経済	14
1. 世界経済と独占	14
2. 金融資本と帝国主義	15
3. 一般 的危機	16
4. 市場経済	17
5. 計画経済	18
6. 社会主義経済	19

第2章 経済循環

I 国民経済の循環と経済主体の役割	22
1. 家計の営みと企業の営み	22
2. 分業と貨幣・市場経済	23
3. 経済循環の形成	24
4. 国民経済と政府の役割	25
II 国民所得の循環図式——物の流れと貨幣の流れ——	26
1. 民間経済の循環図式	26
2. 混合経済の循環図式	29
3. 開放体系の循環図式	30
III 国民所得の諸概念と三面等価の原則	31
1. 国民所得の諸概念	31
2. 国民所得の三面等価の原則	34
IV 国民経済循環の社会会計と理論模型	35
1. 国民経済における社会会計の意義	35
2. 国民会計におけるいくつかの 勘定体系	36
3. 経済循環の理論模型	39

第3章 国民所得

I 有効需要の原理	41
1. 巨視的モデル	41
2. 有効需要の原理	41
II 消費と貯蓄	43
1. 国民所得と消費・貯蓄	43
2. 消費性向と貯蓄性向	45
III 投資	47
1. 投資の意義	47
2. 投資の決定要因	47
3. 予想の役割	50
IV 国民所得の決定	50
1. 投資・貯蓄の所得決定	50
2. 限界消費性向と投資乗数	53

3. 諸条件の変化と国民所得水準の変化……………55

第4章 価格と物価

I 価格と機構の役割……………	57
1. みえぎる手……………	57
2. 経済主体の行動とバロメーターとしての価格……………	58
3. 競争と資源の最適配分……………	59
4. 価格機構を阻害するもの……………	60
II 需要と供給……………	62
1. 市場価格の決定……………	62
2. 均衡の存在と安定……………	63
3. くもの果理論……………	64
4. 需給の均衡と一般均衡論、部分均衡論……………	65
III 競争条件と価格形成……………	66
1. 市場構造の類型……………	66
2. 企業行動の目的……………	68
3. 完全競争のもとでの価格形成……………	69
4. 不完全競争・独占的競争における価格形成……………	72
5. フルコスト原理……………	74
6. 屈折需要曲線……………	75
7. 参入阻止価格の理論……………	76
8. 有効競争……………	77
IV 物 価……………	78
1. ミクロの価格理論とマクロの物価理論……………	78
2. 物価の動きに影響する要因……………	78
3. 物価指数……………	80

第5章 金融と財政

I 経済循環と貨幣……………	82
1. 貨幣経済と混合経済……………	82
2. 貨幣の機能と本質……………	83
II 金融の機構と機能……………	85
1. 現金通貨の供給機構……………	85
2. 預金通貨の供給機構……………	87
3. 貨幣需要と利子率・物価……………	89
III 財政の機構と機能……………	91
1. 政府支出とその構造変化……………	91
2. 租税収入とその構造……………	93
3. 経済循環における財政機能……………	94
IV 経済変動と金融・財政政策……………	96
1. 景気変動と金融政策……………	96
2. 景気変動と財政政策……………	97
3. 金融・財政政策の一体化……………	98

第6章 国際経済

I 国際分業の理論……………	102
1. 比較生産費の原理……………	102
2. 国際分業理論の近代化……………	104
II 国際収支とその均衡……………	110
1. 国際取引の構造と均衡の意味……………	110
2. 国際均衡と価格分析……………	112
3. 所得分析と国際均衡……………	115
III 保護貿易政策……………	118
1. 保護手段……………	118
2. 保護貿易の理論的根拠……………	119

4 目 次

IV 世界経済の諸問題	120
1. 経済統合問題	120
2. 南北問題と開発理論	121
3. 東西貿易問題と社会主義経済圏内貿易	122
4. 国際通貨問題	123
第7章 経済変動	
I 資本主義の経済変動	125
1. 循環的変動の型	125
2. 景気循環の局面	126
II 経済変動理論の三つの型	127
III サミュエルソン＝ヒックス型モデル	129
1. サミュエルソン・モデル	129
2. ヒックス・モデル	131
3. サミュエルソン＝ヒックス型モデルの発展	135
IV カレツキ＝カルドア型モデル	136
1. カレツキ・モデル	136
2. カルドア・モデル	139
3. カレツキ＝カルドア型モデルの発展	142
V ドーマー＝ハロッド型モデル	143
1. ドーマー・モデル	143
2. ハロッド・モデル	144
3. ドーマー＝ハロッド型モデルの安定性理論的展開	152
第8章 経済学的发展	
I 重商主義と重農主義	155
1. 重商主義とその特徴	155
2. 重商主義とケインズ経済学	155
3. 重農学派	156
II 古典派経済学	158
1. アダム・スミス経済学と産業資本の理念	158
2. リカード経済学とマクロ動学	161
3. 歴史学派	163
III マルクス主義経済学	164
1. 労働価値説とマルクス経済学	164
2. マルクス経済学の発展——「金融資本論」と「帝国主義論」	169
3. 再生産表式	170
IV 新古典派経済学	173
1. 限界効用価値説とオーストリア学派	173
2. レオン・ワルラスの一般均衡理論	175
3. マーシャルとケンブリッジ学派	176
4. ヴィクセルと北欧学派	177
V ケインズ派経済学	178
1. ケインズ経済学の基本的性格とケインズ革命	178
2. 後期ケインズ経済学	181
索引	184

目次

1-1	東西における生産様式……………	2	3-12	資本の限界効率表の変化と投資……………	56
1-2	生産過程……………	3	4-1	需要と供給による価格の決定……………	62
1-3	領主と農民との再生産……………	4	4-2	特殊な場合の需要と供給……………	63
1-4	生産・分配・交換・消費の関係……………	5	4-3	均衡へのプロセス……………	64
1-5	資本の本源的蓄積の過程……………	7	4-4	動学的なくもの果……………	64
1-6	資本……………	9	4-5	拡散型のくもの果……………	65
1-7	資本の生産過程……………	10	4-6	持続性のある振動……………	65
1-8	資本蓄積過程……………	11	4-7	需要曲線の移動……………	65
1-9	蓄積の矛盾の発生……………	13	4-8	価格機構の作用……………	68
1-10	資本の輸出……………	15	4-9	総費用曲線……………	69
1-11	第二次世界大戦後の社会主義圏……………	16	4-10	総収入、総費用、総利潤……………	70
1-12	資本主義・社会主義・経済競争の 見通し……………	17	4-11	平均費用、限界費用……………	70
1-13	社会主義の分配……………	19	4-12	完全競争における企業の主体的均 衡……………	71
1-14	資本主義の分配(1)……………	20	4-13	完全競争均衡……………	71
1-15	資本主義の分配(2)……………	20	4-14	不完全競争・独占的競争……………	72
2-1	家計と企業の営み……………	22	4-15	不完全競争における主体的均衡……………	73
2-2	国民経済の循環の流れ……………	24	4-16	産業の均衡……………	73
2-3	民間経済の循環図式……………	27	4-17	2本の需要曲線……………	74
2-4	企業の付加価値と国民所得……………	28	4-18	過剰利潤の消滅にいたる二つのル ート……………	74
2-5	混合経済の循環図式……………	29	4-19	屈折需要曲線……………	75
2-6	開放体系の循環図式……………	31	4-20	長期費用曲線と短期費用曲線……………	77
2-7	国民所得 五つの概念の関係……………	33	4-21	超過需要がある場合とコスト上昇 がある場合との価格決定……………	79
2-8	国民所得循環の四局面……………	34	5-1	貨幣の循環……………	82
2-9	国民所得の三面等価……………	35	5-2	貨幣の種類……………	85
3-1	セイの法則……………	42	5-3	現金通貨種類別流通高……………	86
3-2	有効需要の原理……………	42	5-4	現金通貨の供給……………	87
3-3	所得と消費・貯蓄の関係……………	44	5-5	銀行間の信用創造……………	88
3-4	国民所得と消費関数……………	45	5-6	預金通貨の構成比……………	88
3-5	所得と平均消費性向……………	46	5-7	利子率の決定……………	90
3-6	限界消費性向……………	46	5-8	イギリスにおける政府支出のGN P(要素費用)に対する比率……………	91
3-7	資本の限界効率と投資との関係……………	49	5-9	歳入構造の変化……………	93
3-8	均衡国民所得決定……………	52	5-10	租税・印紙収入の構成……………	93
3-9	投資の乗数効果……………	53	5-11	財政支出の効果……………	95
3-10	投資の増分 ΔI が消費および貯蓄 にあたえる影響……………	54	5-12	減税の効果……………	95
3-11	消費性向の変化が国民所得水準に 及ぼす影響……………	55			

6 目 次

6-1	貿易無差別曲線	105	7-6	カレツキ型循環モデル	139
6-2	オファー曲線	106	7-7	カルドア・モデルの均衡点	140
6-3	貿易の均衡	107	7-8	カルドア型循環モデル	141
6-4	国際収支の内容とバランス	112	7-9	適正成長経路	145
6-5	外国為替市場の均衡	113	7-10	$G_n < G_m$ の場合の上位転換	150
6-6	外国為替相場切下げの効果	114	7-11	$G_n > G_m$ の場合の上位転換	151
6-7	経済の均衡と乗数効果（貿易のない場合）	116	7-12	下位転換	151
6-8	経済の均衡と乗数効果（貿易のある場合）	117	8-1	経済学の系譜	154
7-1	景気循環の局面	126	8-2	経済表の範式	157
7-2	循環的変動の型	131	8-3	経済表の解説	158
7-3	ヒックスの制約的循環モデル	133	8-4	リカード体系	162
7-4	カレツキ型投資関数	137	8-5	マルクス経済学の基本構造	165
7-5	短期投資関数のシフト	138	8-6	レーニンの再生産表式	171
			8-7	ケインズ理論と古典派理論	179
			8-8	ケインズ理論の基本構造	181

表 目 次

1-1	周期的産業恐慌	12	2-6	昭和35年3月末国民貸借対照表	40
1-2	世界の領土・人口・工業生産高	17	6-1	比較生産費とそれにもとづく貿易 特化の例	103
2-1	国民所得表(1)粗国民所得表	36	6-2	生産要素価格表	108
2-2	国民所得表(2)純国民所得表	36	7-1	限界消費性向・加速度係数と国民 所得の変動	131
2-3	昭和44年度国民総生産と総支出勘 定	37	8-1	レオンチェフの産業連関表	176
2-4	昭和44年度個人所得勘定	37			
2-5	産業連関表（模型例）	38			

第1章 経済体制

I 資本主義発達史

1. 経済学

経済学 (Political Economy) は、人間社会における物的生活資料の生産および交換を支配する諸法則の学であるが、狭義の経済学は、資本主義的生産様式の発生と発展、すなわち資本主義社会がどこからきて、'どのような法則によって運動し、そしてどこへゆくか、を研究する。広義の経済学は、狭義の経済学を前提として、原始共同体、アジア的生産様式、奴隸制、封建制、および社会主義・共産主義などの**生産様式**を研究する。

(1) 生産様式 生産様式は生産の仕方、方法であり、その内容からいえば、労働とその用具を媒介とする人間と自然との関係、すなわち**生産能力**と、形式からいえば、人と人との関係、すなわち**生産関係**をあらわす。経済学は生産諸力を内容とする人と人との関係を研究する。物質的・社会的生産がその対象である。人間は生存してゆくためには消費をやめるわけにゆかず、消費をくりかえしてゆくためには、生産が再生産としてくりかえされてゆかねばならない。生産に当たって人間は、「道具をつくる動物」であるといわれるように、まず手の延長である道具をつくって自然にはたらきかける。この道具は、旧石器時代から新石器時代へと発達し、さらに青銅の器具から鉄製のものにいたる。いっぽう人間は火を発見してこれをつかい、家畜と生活してその乳や肉を飲食し、毛皮をもちい、木の枝はしだいに精巧な弓矢やスキ・クワ、小舟などに発達する。いかなる道具をつかって自然にはたらきかけたかという労働用具によって、人間の歴史的な時代は洞察される。自然の脅威や敵をふせぐために、共同の集団生活をしていた原始の人間は、食料や狩猟の場をもとめて移動していたが、農耕段階にはいるにおよんで共に生産し、共同に分配・消費する生活をしていた。それは道具の未発達からであって、これを**原始共同体**というが、人口がふえ、道具が発達するにつれ、生産の能率を上げるためまず道具が私有財産になった。狩や戦いでよりよい働きをしたものは余計に分配にあずかり、しだいに貧富の差が生じ、みなごろしであった集団と集団との戦いも、一定の生産力の発達を前提として、勝った集団は負けた集団を捕虜とし奴隸としてここに肉体労働を担当するものと、それを犠牲に文化と政治をもっばらにするものとに分かれた。

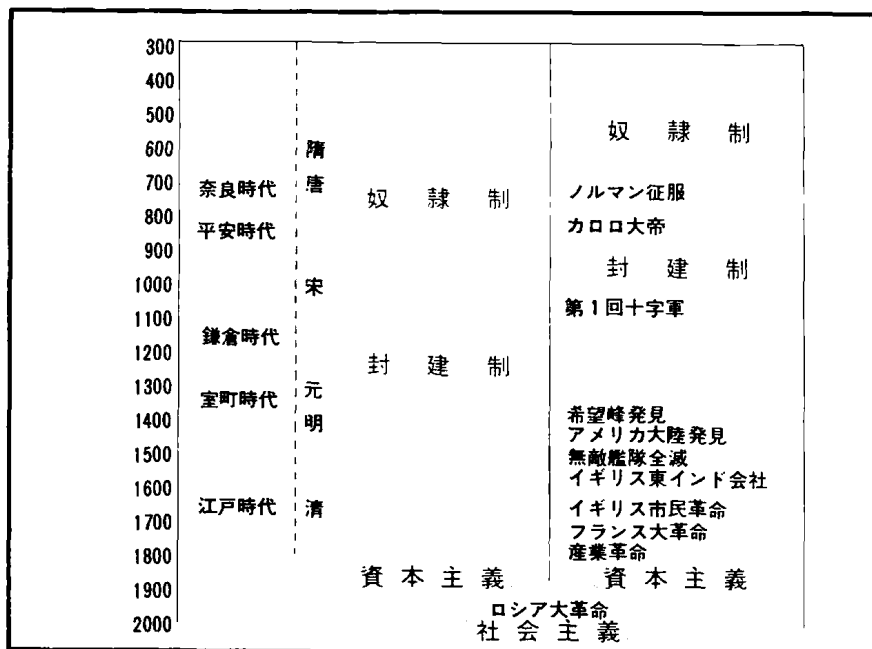
奴隸は家の奴隸から生産の奴隸となり、典型的なギリシャ、ローマの古典的な**奴隸制**となったが、地球の広汎な地域には、しばしば灌漑耕作の必要とむすびついて専制君主を代表とする共同体の土地所有であるアジア的生産様式が支配し、原始的な奴隸制・土地の共同耕作があらわれるが、ローマの奴隸制は大土地所有を生み、そこから半ば自由な小作人が生じ、ここから

2 第1章 経済体制

封建制の農奴制がはじまった。奴隷は物いう家畜・道具とみなされて酷使されたため、生産にはげんで道具を愛し改良する意欲をもたず、支配貴族の奢侈と戦争は、奴隷狩りにもかかわらず生産力を維持できず、封建制にうつった。

地域によっては、事情によって原始共同体から直接に封建制が生じたが、封建制は紀元500年ごろから約1000年にわたって東西におこなわれ、後にみるように15～16世紀のうちに、資本主義体制にうつっていった。

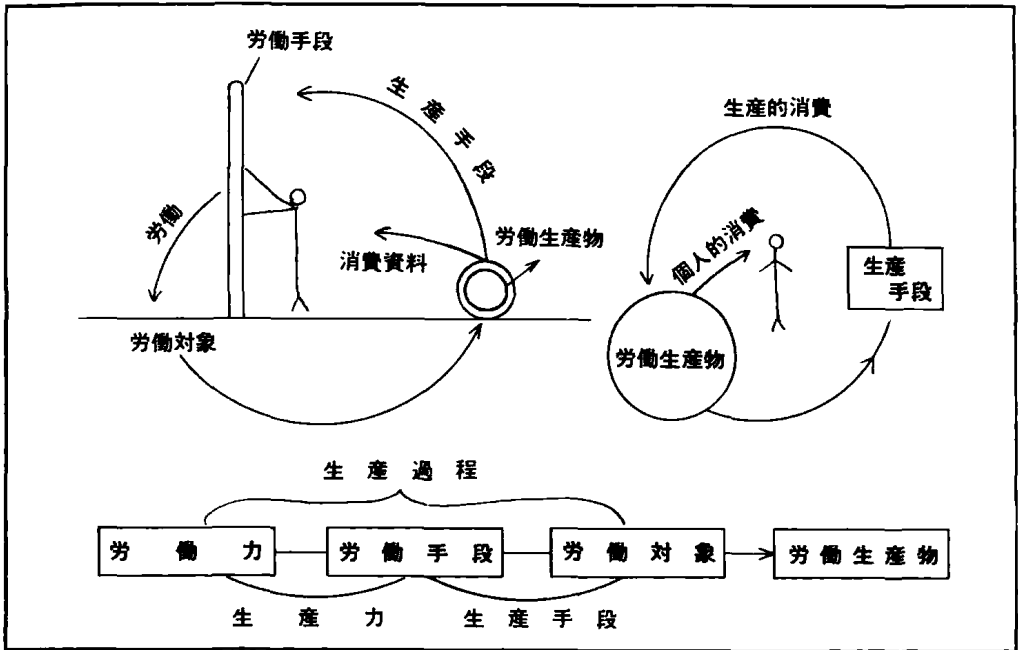
(図1-1) 東西における生産様式



(2) 生産関係 社会存続の基礎過程として、人間は労働により自然にはたらきかけて労働生産物をつくりだすが、はたらきかけの対象たる自然は労働対象である。労働対象は、まず土地・鉱山・河川・海面などから、たとえば棉花・綿糸・布・鉱石・銑鉄・鋼鉄というように、しだいにそれ自身が労働生産物となり、後者は原料といわれる。原料をふくむ労働対象と労働用具を、結果である生産物からみて、生産手段といい、労働を生産的労働という。労働用具には生産の筋骨体系である、道具、ハンマー、機械のようなものと、生産の脈管体系であるタル、オケ、クダ、容器のような装置とに分けられ、広義の生産手段には道路・倉庫や港湾施設などがはいる。

社会的な労働の過程とその生産物の分配の過程が生産関係であり、生産過程における共通の条件と役割とによってむすびついた階級という人間集団をつくる。職業は生産における技術的

(図1-2) 生産過程



な関係であるが、階級は、貴族と奴隷、荘園の領主と農奴、ギルドの親方と職人、資本主義における資本家と地主と労働者のように、社会的・歴史的なものであり、生産過程で果たす役割によって決まり、たんなる収入の差ではない。支配する階級は生産手段を所有しており、国家を形成するが、階級は古代、中世においては法制・道徳・宗教などの外被におおわれ、身分という姿をとった。近代資本主義で経済関係が明瞭にあらわれて、資本家・地主・労働者とその中間にある農民・手工業者および知識階級などの新旧の中産階級となった。

①生産手段がどのように分配されているか。②労働力と生産手段との結びつきはどのようになされているか。③労働生産物はどのように分配されるか。これが生産様式の内容であり、この生産様式に規定されて、政治・法制および家族形態、その他の精神構造も決まってくる。たとえば資本主義の生産様式には、議会制と形式的な民主主義、一夫一婦の家族制度、プロテスタント的キリスト教などが対応するように。

2. 自然経済と商品経済

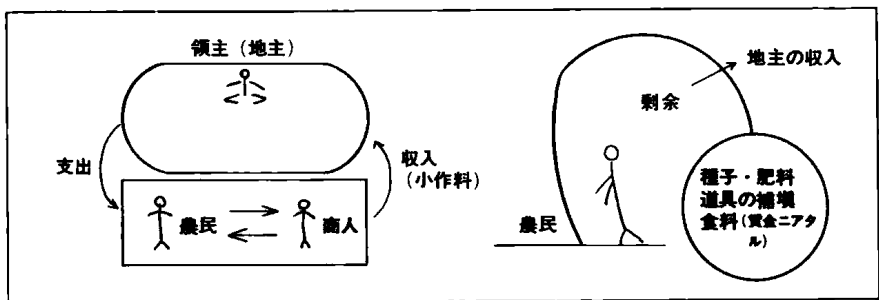
封建制で土地の領有が支配者にとり決定的であったのは、牧畜・農耕を主として土地が主要な生産手段であったからである。土地の一部は領主の直接所有で、農民は一定の期間ここで夫役を課せられ労働しなければならない。これを労働地代という。しかし、その残りの土地は農民たちに分与され、彼らは自分の農具や家畜で労働した。その生産物の一部は強制徴収された。

これは**生産物地代**である。農民は農奴として、奴隷よりは自由であったが、領主の権力に裏づけられた経済外強制により、土地の付属物としてこれにしばりつけられ、剰余労働を搾取され、移転の自由も婚姻・営利の自由もなく、作付の種類・場所などを指定された。イギリスではすでに14世紀の終わりには小作料を貨幣でおさめて、**貨幣地代**にうつったが、それが**封建地代**であることにはかわりはない。

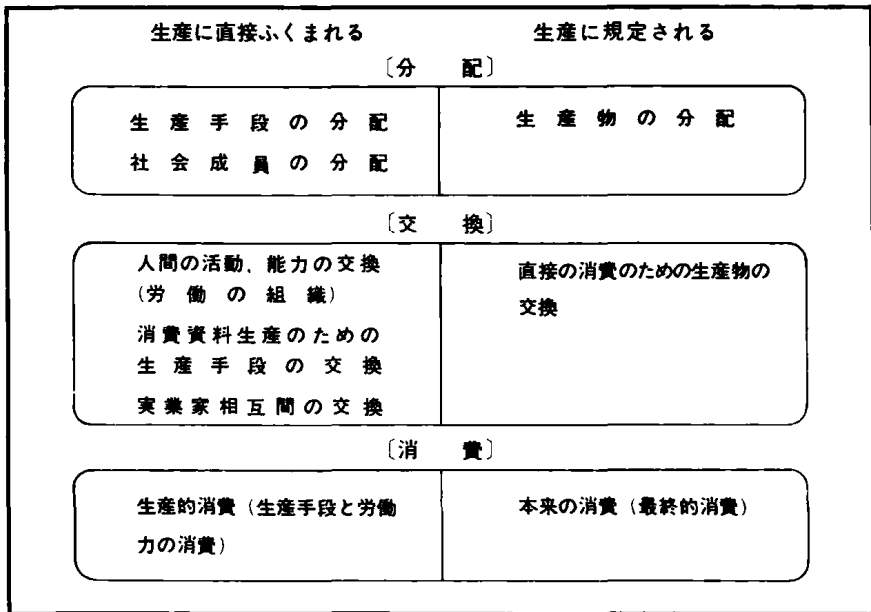
封建社会には農奴のほかには独立生産者として自分の土地を所有し、身分的隷属の度のわりに軽い**自由農民**と都市の**手工業者**とがいる。封建社会にいたるまで、基本的に経済生活は農業を中心とする自給自足の**自然経済**であるが、性別・年齢別の自然的分業のほかに、生産力が発達して牧畜、農業、手工業の社会的分業がはじまると、労働生産物は自然経済におけるように生産と消費の範囲が一致して自家消費されず、売買・交換をめぐって生産されるようになる。すなわち生産手段の私的所有と社会的分業という条件のもとに労働生産物は商品となり、自然経済は**商品経済**に転化する。

商品交換はまず集団と集団とのあいだに発生し、剰余生産物の交換がいったんはじまると、これは各集団内の社会生活に反作用して、各集団内に社会的分業と生産手段の私有が発達する。上述の農民と手工業者のような独立小生産者が生じるが、これらの人たちは道具・原料や店・仕事場をもっているかぎり資本家の卵であり、土地を所有しているかぎりでは地主、自分自身はたらくかぎりでは労働者である。これらの人たちの商品生産を**単純商品生産**といい、資本主義商品生産の前提であるが、これと区別される。単純商品生産の社会というものはないが、古代・中世の社会でそのかたすみに経済制度として単純商品生産がおこなわれ、貨幣も商人もそこに発生した。

(図1-3) 領主と農民との再生産



(図1-4) 生産・分配・交換・消費の関係



(マルクス『経済学批判』序説より作成)

商品交換と貨幣 上述の手工業者と農民との交換をみると、お互いに都市とその近辺の農村の住民であり、その生活はよく知られていたから、農民が毎日10時間ずつはたらいてつくった穀物と、手工業者が毎日10時間ずつはたらいてつくったスキ・クワが交換された。穀物やスキ・クワは商品であり、富であり、生活のために役に立つ**使用価値**である。役に立つという性質は一つの質であり、その大小を比較できないが、交換は量の問題であり、それぞれの商品は、特別になまけものでもなく、特別に勤勉でもないふつうの労働者が、あたえられた社会のあたえられた技術で、ふつうの労働の強度・熟練で何時間か労働したその労働の結晶としての**価値**である。この商品の価値は、交換において、たとえば1丁のカマは50キロの小麦に等しいという形であらわされる。カマの価値が小麦であらわされるのであって、50キロの小麦が1丁のカマの**交換価値**である。

x 量のA商品が y 量のB商品に等しいという等式で、式の左辺を**相対的価値形態**、式の右辺を**等価形態**といい、この単純な価値形態は、歴史的にも論理的にも、AがBとのみならず、C、D、E、……などと交換される。**拡大された価値形態**に発展し、はじめB商品でのみあらわされたA商品の価値は、しだいに目にみえ、客観的なものになってくる。交換によって価値が決まるようにみえたのが、しだいに価値によって交換がおこなわれることが確立されてくる。そしてもっともしばしば交換にあらわれてくるA商品は、やがて歴史的にも論理的にも価値形態

の式の右辺にあらわれるようになって、**一般的価値形態**となり、歴史的にも論理的にもそれが金・商品におちついて**貨幣形態**が確立し、資本主義的生産様式の支配するときに、金が一般的等価として国家のスタンプをおされて、金鑄貨となる。

しばしば貨幣は交換の過程から人間が物物交換の不便を解消するため、発明したものというふうに実用主義的に説明されることがあるが、もしそのようであるなら、人間はいつでも貨幣を廃止し、紙をもってこれに代用することが可能なはずであるが、商品交換は、商品が使用価値であるためにはまず価値であることを証明しなければならず、また価値であるためには使用価値であることを証明しなければならない。この矛盾を解いて運動する形態をあたえるため、歴史的・実践的に貨幣を必要としたのである。

貨幣はまずそれ自身が価値であることによって、一般商品の価値の尺度としての役目を果たし、これを基に度量標準たる価格の単位となる。他商品の価値を貨幣ではかってあらわしたものが価格である。だから商品の価値の大きさがかわらなければ、商品の価格は、貨幣の価値の大きさの変動につれてかわるし、貨幣の価値が不変ならば、商品の価格は、商品自身の価値の大きさによって決まる。物価の変動をみると、このことはたいせつである。そこで理論的にいえば貨幣は価格をもたない。実用主義的に貨幣を**計算単位**と仮定すれば、価値と価格の区別はなくなり、自動車1台と靴1足をどうして加算するかという難問が生じてくる。このような**価値尺度**の機能をもとに、交換の媒介すなわち**流通手段**の役割をするが、これらの役割では貨幣は頭のなかで観念的に存在していれば足り、したがって紙幣とか銀・銅その他の代用物で足りる。しかし蓄蔵貨幣・支払手段・世界貨幣としての貨幣は貨幣としての貨幣で、金そのものでなくてはその役目は果たせない。こんにちでも手形・小切手が不渡になり、ドルの危機があるのは現金そのものは紙ではすまず、貨幣は生産の社会的性質と個人的な私的所有の商品交換の矛盾をあらわしているからである。

3. 資本主義の発生

さて、手工業者や農民はそれぞれ市場に生産物をもたらしてお互いに競争するが、よい品物を安く売るのがその競争に勝って、負けたものの財産を吸収し、ここに**価値法則**によって、下からの競争によって、財産の所有者と非所有者の区別が生じてくる。単純商品経済における独立生産者のいわゆる両極分解、階層分化があって、資本家と労働者とが生じてくる。しかし他方に商人がでてきて、安く買って高く売ったり、だましたりして貨幣をため、都市・農村を巡回して農民や手工業者に、原料・道具を、また資金を貸しあたえ、生産物を買いたたいて売りさばいてやったりして、しだいに商人が資本家になり、農民や手工業者はその住居にいるままで隷属して事実上の賃金労働者になる関係が生じる。これがもう一歩すすめば、農民や手工業者は仕事場を捨てて商人たる資本家の仕事場にあつまり、多勢のものが一ヵ所に相寄り相あつまり、協業・分業による社会的労働をするようになる。これが**工場制手工業**であり、**マニ**

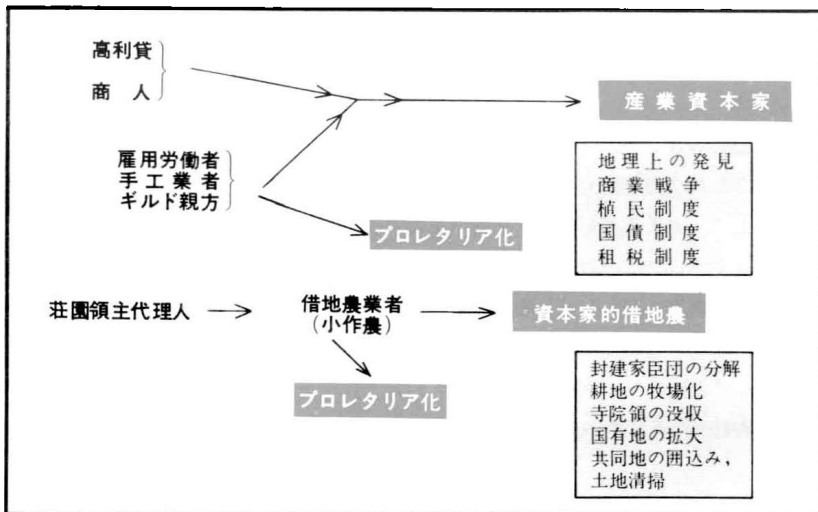
ユファクチュアである。アダム・スミス (A. Smith) はマニュファクチュアの経済学者といわれるが、ここまでくれば手工業の技術は発達して、機械の発明の基礎ができ上がる。

理論的にみた上述の過程を歴史的にみれば、聖地がトルコ人によって占領されたため、11世紀のころから西ヨーロッパの封建諸侯は、いくたびか十字軍の遠征をこころみ、このため東方諸国の絹・香料・宝石、その他の物産によって欲望がめざめた。貨幣の追求は、封建的な農民の解体とともに搾取をつよめたが、東方の富への追求は、ついにアメリカ大陸や太平洋の発見、アフリカの南端をめぐるインド洋へ出るアジアへのみちの発見をみちびきだし、地球のまわることが富の追求により実証された。こうしてスペイン、ポルトガルから、フランス、オランダを経て、イギリスという順で、商業戦争はイギリスの勝利に終わった。

4. イギリス資本主義の成立

イギリスでは封建体制のなかに商品生産が起こってくると、領主と商人とは互いにその必要からむすびつき、商人は13世紀のころからしだいに外国商人を排除し、貨幣の力で都市の自治権を買い取り、商人ギルドをつくって結集した。14世紀になるとこれに対抗して職業別の手工業者のギルドがつくれ、製品の種類・数量・価格・原料・労働時間などにわたって身分的に統制した。14世紀にはベストがヨーロッパをおそい、イギリスの農村も人口が減り、これは農民の収入に一時有利に作用したが、14世紀から15世紀にかけて絶対主義の政権は多くの賃金統制令によってこれをおさえた。当時イギリスはヨーロッパ最大の羊毛の産地であったが、しだいに毛織物の輸出がすすみ、毛織物産業を中心に地域的な市場圏というものができて国民経済が成立してくる。15世紀にはイギリス人口の大部分はまだ自由な農民であり、自分の農場をも

(図1-5) 資本の本源的蓄積の過程



っていたが、16世紀になるともうその大部分は土地をうしなっていた。14世紀には中世に特有な農民一揆が宗教改革とむすびついてイギリスでも起き、大土地所有者である教会・寺院にたいしてたたかわれる。15世紀には最初の**土地囲込み運動**が起こり、農民は土地から追放され、土地は羊を飼う牧場とされた。土地をうばわれたプロレタリア、浮浪人にたいしては苛酷な血の立法といわれる労働立法が相ついで制定され、彼らは獄屋につなぐれ焼印を押されて強制労働をまなばされた。16世紀には金・銀が新大陸からヨーロッパに流入し、いわゆる**価格革命**がおこなわれ、物価が騰貴し為替論争を生じ、この過程で重金主義は重商主義にうつる。この世紀には、東方諸国・トルコ・ロシアその他アフリカ、アメリカ、インドなどにたいする植民会社ができ、外国貿易による利権を独占したが、とくにアフリカにたいする奴隷貿易は数千万の黒人奴隷を1人当たり20～25ポンドほどで買って、その倍ほどにして主として北アメリカの南部諸州に売った。17世紀には金銀の流入はやみ、視野は当然にマニュファクチュアの生産に向けられたが、外国商人を追放した商業資本は16世紀の後半莫大な貨幣資本を蓄積し、スペインの商業資本と対立・抗争したが、イギリス商船隊はこれを打ちやぶり、封建領主は土地所有と商人とのうえに立って、大教会または国教会とむすび、実務に明かるい清教徒を圧迫し、教会・寺院の下層僧侶や下級の封建家臣団は没落し、修道院の解散やギルドの財産の没収となり、彼らは囲込みによって土地を追われた農民とともに貨幣経済のなかに巻き込まれた。

その他イングランド銀行の創設による高利貸の追放、公債・租税制度をとおしていわゆる資本の**本源的**ないし**原始的蓄積**の過程が進行し、一方に貨幣・金銀の集積、他方にはたらかねば生活のみちのない無産の大衆の集積をつくり出し、この二つが必然的にむすびつけられて**産業資本**が成立する。それは典型的にイギリスでおこなわれ、1649年のクロムウェル革命、1688年の名誉革命を経て国内市場をつくり出し、比較的純粋に資本家・地主・労働者の三階級を生み、イギリス革命は産業革命となり、1832年の選挙法の改正にいたる。この過程を背景に**古典派経済学**が成立する。

5. 資本主義の発展

この過程は多かれ少なかれちがった国際的環境のもとにおこなわれるが、商品経済が封建体制を掘りくずして、資本主義を形成してゆく過程の理論は、しばしば**市場の理論**といわれ、ドイツ・ロシア・日本のようなおくれた資本主義では**歴史学派の経済学**とかローマン主義の経済学といわれるものを生んだ。しかし商品経済の侵入により小生産者は没落しても、彼らは自給自足していた消費資料を市場で買わねばならず、労働力を市場で売らねばならず、生産手段もまた商品となって労働用具や原料の市場がひらかれ、社会は没落するのでなくて発展するのである。資本主義社会は資本の蓄積により拡大再生産をおこなって人類をより一段高い段階におしすすめる。